子ども大学学生新聞

第２８号
子ども大学
かわごえ新聞部

「東京オリパラの主役は君だ！」

木原先生が「する、見る、支える」のすすめ

一月二三日（土）、東京国際大学第一キャンパス６号館６１９教室で、この大学の准教授・木原慎介先生による授業「２０２０東京オリパラの主役は君だ！」がありました。出席者は四年生三九人、五年生三六人、六年生二一人の計九六人でした。

はじめに先生はオリンピックの変せんについて話されました。古代オリンピックは神にささげるおまつりとして開かれたそうです。そして近代オリンピックは「より速く、より高く、より遠く」をきそうようになりました。いまスポーツは「いつでも、どこでも、だれとでも、自分に合うものを選んで」楽しんでいます。

日本の学校体育がめざしているものは「生涯にわたってスポーツを楽しむことができるようにすること」と話されました。

（篠崎仙太郎記者＝中央小５年）

だれでも主役になれる

二時間目は、日本代表選手対Ｊリーグ選ばつ選手のサッカーの試合をビデオで見て、先生は「どんな人がいるか」と質問されました。学生たちから「選手」「カメラマン」「解説者」などの意見が出ました。先生は「その人たちは、みんな『主役』だ」とおっしゃいました。

また、オリンピックやパラリンピックを作った人たちのお話や、障害者が競技するパラリンピックのビデオを二本見せてくださいました。先生は「すばらしいですよね」「かっこいいですよね」とおっしゃいました。

最後に、先生はスポーツを『する・見る・支える』が、より豊かになれば、それぞれの場で、それぞれの関わり方で、一人一人みんなが主役になれるとおっしゃいました。

二〇二〇年は日本で開さいされるまたとない「東京オリンピック」。ぜひ見に行ったりして関わってみてください、とおっしゃっていました。

（堀越萌加記者＝上戸小４年）

☆木原先生へのインタビュー

Ｑ　なぜ体育が好きになったのですか。

Ａ　楽しいいし、色々な形で自分が主役になれるからです。

Ｑ　好きなスポーツはなんですか？

Ａ　やるならテニス、見るならサッカーですね。

（品川遥紀記者＝高階西小６年、奈村晴冬記者＝高階小４年）

☆学生の授業感想

◇川越南小６年・三沢　成美さん「スポーツは競技に参加している人だけではなく、会場全員が主役だということがわかりました」（増田夢実記者＝名細小６年）

◇川越小４年・矢島美那さん「パラリンピックの選手たちが、すごく一生懸命やっているのを見て、自分も将来、障害のある人と仲良くしたいと思いました」（中島瑞木記者＝名細小６年）

☆記者の授業感想

◇観音寺悠斗記者＝上戸小４年

木原先生のじゅ業を聞いて、古代オリンピックの目標、そして近代の目標、さらに現代のオリンピックの目標まで知ることができました。ぼくはスポーツが大好きなので、このじゅ業を聞けてたのしかったです。

◇増田夢実記者＝名細小学校６年

障害を持っていても努力をしてスポーツをしている人はすごいなと思いました。オリパラに興味が出てきました。

◇吉岡　柊大記者＝上尾東小４年

パラリンピックはあまり観ないのに、いろんな競技や選手がいるんだと思いました。スポーツの長い歴史の中で、オリンピック・パラリンピックが出来たと思うと、すごいことだと思いました。

◇飯野聡真記者＝大塚小５年

木原先生の授業でおどろいたことは、昔はサッカーとラグビーはいっしょで、とくにルールがなかったことです。町の中でボールを置く場所を決め、蹴ったり、投げたりしながら、そこまで運んだそうです。ルールがないとケンカなどがおきるから、ルールが出来てよかったと思いました。

◇秋山花那記者＝鶴ヶ島二小４年

授業を聞いて、私は初め、「オリパラ」とは何だろう?と思いました。先生がオリパラの意味を「オリンピック」と「パラリンピック」と言っていたので、なるほどと思いました。

でも、主役になるということが、また不思議に思いました。そこで先生は本田選手のサッカーの試合の場面をビデオで見せてくれました。そして「ビデオに映っている人を全部書いて」と言われて、みんなで黒板に書きました。選手、監督、司会者、サポーター、芝生を作っている人、スタッフ、テレビで応援している人など、みんな関係があると言いました。だから主役なのです。私は選手にはなれるかどうかわからないけど、いろんなところで「主役」になりたいです。

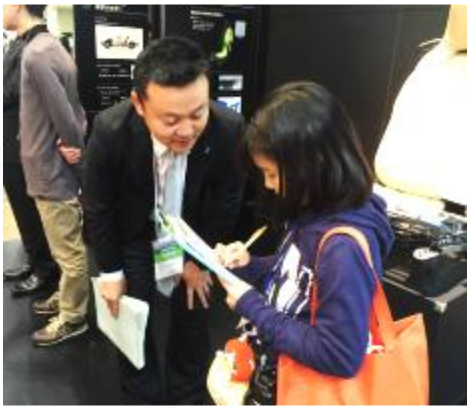
会社のエコ作戦を見学

エコプロダクツ2015に79人参加

東京ビッグサイト東ホールで開催された「エコプロダクツ二〇一五」に一二月一二日（土）、学生、保護者、スタッフ、ジュニアスタッフの計七九人がバス二台で参加しました。

出展していたブースは七〇〇社。学生たちは事前に調べてきたデータをもとに、一六班に分かれて、それぞれの班で行きたいところに行きました。出展ブースの中には、ワークショップをしたり、ミニ講演会をしたり、クイズ大会をしているところもありました。また、さかなクンをはじめとする芸能人もイベントステージで公演していました。

学生全員に「エコスタディノート」が配布され、真剣にメモする学生の姿が見られました。また、引率してくださった保護者の方々も学生に負けじとメモをたくさん取られていました。



皆さんは一九八五年に公開された映画「バック・トゥ・ザ・フューチャー２」をご存知でしょうか。舞台は一九八五年の三〇年後、つまり二〇一五年にタイムスリップしました。それを記念して、映画に登場した、ゴミを燃料にして動く車「デロリアン」の展示もありました。クイズに正解すると搭乗できることもあり、行列ができていました。

三日間の総来場者は一六万九一一八人と大盛況で終わりました。

（長坂星名シニア記者＝高階中２年）

✧イオン

「森の循環」のパネルを使用して、木を植える、育てる、活かし、商品原料や店舗の資材に活用していることを教えてもらいました。CO_2 を減らし、自然の恵みを守り、資源を大切に使い、よりよい社会を作る取り組みを行っています。

環境問題について、このような取り組みをしているのは、とてもいいと思いました。地域の子どもたちが協力して木を植えていて、環境に対して実際に自分たちの手で解決しようとしているのがとても良いと思いました。

（石井結衣記者＝霞ヶ関南小５年）

✧ユニチャーム

ユニチャームは紙おむつのリサイクルを通じた環境配慮活動や、おむつのリサイクルシステムについて展示していました。使った紙おむつを回収し、オゾン処理をしたあと、低質パルプ分離して洗浄、消毒します。それをねこ砂（デオトイレ）にしました。案内係の石村令子さんにインタビューしました。

Ｑ　紙おむつのリサイクル以外にエコに取り組んでいることは何ですか。

Ａ　昔のおむつより三分の一の大きさにしたことにより、ダンボール一箱に入る数が増えたので、大量輸送が可能になりました。トラックの台数をへらすことができて CO_2 削減につながっています。

（土田莉子記者＝山田小６年）

✧びっくりドンキー

びっくりドンキーでは、家の使用ずみ天ぷら油を回収する道具と、生ごみのリサイクルについて展示されていました。天ぷら油はイルミネーションやボイラーの電気、せっけんなどにリサイクルするエコをしています。生ごみのリサイクルは、生ごみを生ごみ処理機でリサイクルして肥料の原料にして、畑や田んぼに使うエコをしています。

私は、びっくりドンキーはふつうのレストランと思っていたけれど、こんな工夫をしていて、すごいと思いました。

（堀越萌加記者＝上戸小４年）

✧日本ＣＣＳ調査株式会社

CO_2 を集めて地中に入れるパイプのもけいが、スーパーボールを使っててんじされていました。工場や火力発電所から出るガスから CO_2 だけを集めて地中にふうじこめ、地域の空気をきれいにし、温だん化をふせぐのに役立つよう実験しています。

ぼくは、学校で温だん化について勉強しました。CO_2 がふえると地球の緑の面積が小さくなることを知りました。だから CO_2 をガスから別けるぎじゅつがすごいと思いました。

エコプロダクツに行って、いろいろな会社がエコに一生けんめい取り組んでいることが分かりました。ぼくは自分にできることがあるはずだと思いました。これからは実行していきたいです。

（観音寺悠斗記者＝上戸小４年）

✧全国農業協同組合連合会

田んぼに住んでいる生き物などのこと、お米のミルク、昔と今の田んぼの姿などが展示されていました。田んぼを大切にしたり、お米をたくさん食べることにより、田んぼにいる生き物などを守ることができることがエコ、と係の宮崎さんは言っていました。

（増田夢実記者＝名細小６年）

☆記者の感想

◇秋山花那記者＝鶴ヶ島二小４年

一番、心に残ったのは、「セブン・アイ」です。ここでは、ペットボトルのパッケージからペットボトルにすることがあったり、コーヒーのコップを木材で作っていたりしていました。

別のところにも行きました。そこで気づいたのは、『エコ』のために、いっぱい使われているのは木材ということです。木は公園など自然の中で主役なのに、環境にも『エコ』として使われているから大活躍だなと思いました。